



マレーシアの光と影

信田 敏宏
のぶた としひろ
 民博グローバル現象研究部

「斧は忘れても、木は覚えている」

原題：The Tree Remembers(還有一些樹)

2019年/台湾/マングリン、英語、マレー語、オラン・アスリ語/89分

監督：ラウ・ケクファット



上：森林伐採によって完全に破壊された森の果樹園(提供：ラウ・ケクファット、ペラ州、2017年)
 下：緑に囲まれ、自然豊かなオラン・アスリ(トゥミアール)の集落(提供：ラウ・ケクファット、ペラ州、2016年)



抹消してはならない歴史

本作の舞台はマレーシア。開発による森林伐採に苦しむ先住民オラン・アスリの現状と、一九六九年にマレー人と華人のあいだに起きた民族衝突事件である「人種暴動」の隠された真実に迫るドキュメンタリー映画である。人種暴動に関しては、その原因や実態など、マレーシアでは公に議論することはまだ許されていない。こうした事情から、本作がマレーシアで上映されるか否かは定かではない。

ここでは、紙幅の関係上、オラン・アスリの話をおもに紹介してみたい。本作にはオラン・アスリの小説家マハット・アキヤが登場し、オラン・アスリの苦難の歴史を語る。マレーシアではかつて、ムスリム(イスラム教徒)であるマレー人が、非ムスリムのオラン・アスリを奴隷としていた時代があった。二〇世紀初頭まで、オラン・アスリの集落はマレー人による奴隷狩りに遭っていた。襲撃者はパラシという大きな山刀で村を襲い、多くの村人が殺され、子どもや女性が連れ去られた。子どもはマレー人の養子となり、女性は妻や売春婦として売られたという。襲撃の前にパラシを研ぐ大きな石は、現在も各地のオラン・アスリ集落近くに残されており、本作でも紹介されている。奴隷狩りはオラン・アスリの負の歴史のほんの一部にすぎない。

その裏に隠された暗部があると言っても過言ではない。

本作では、熱帯雨林に覆われたダイナミックで美しい自然環境や、のどかな村のなかで無邪気に遊ぶオラン・アスリの子どもたちの姿が、オラン・アスリ伝統の鼻笛の音色とともに映し出されている。一方で、こうした情景の儚さを物語るかのように、オラン・アスリの村の村長の歌が響き渡る。ランプーターンやドリアン

い。マハット・アキヤは「オラン・アスリの抑圧の歴史は抹消してはならない」と語る。

失われゆく森

奴隷狩りを恐れた人びとは、より内陸部へ、より奥地へと逃げ込んでいった。しかし、オラン・アスリの



鼻笛を吹くオラン・アスリ(トゥミアール)の男性(提供：ラウ・ケクファット、ペラ州、2016年)

苦難は、形を変えて今も続いている。生活の糧となる森が恐ろしい勢いで失われているのである。環境保護団体からの非難に耳を傾けることなく、マレーシア政府は森林伐採を進める。アブラヤシのプランテーション開発や木材生産のためだという。都市や町の周辺部に始まり、今ではペラ州やクランタン州などの奥地の森にまで開発の手は伸びてきている。そうした開発には利権がつきまとい、利権の裏にはギャング集団の暗躍も噂されている。マレーシア発展の影には、オラン・アスリや自然環境を犠牲にした開発や森林伐採、その果樹園を失い、絶望した村長がマレーシア国歌のメロディーに合わせて替え歌を歌う。「美しい月の光が川面に映り、ワニもいたのだが、死んでしまったそうだ。政治家の約束を信じちゃいけない。約束が実現したためしがないから」。前半のクライマックス、映像は一頭のゾウに切り替わる。森林破壊で森から出て、高速道路を歩いているところだ。この直後の映像には胸を締めつけられる。

「人種暴動」の残したものの

映画の後半は、「人種暴動」に焦点を当て、親族を殺された華人、虐殺の現場を目撃した人、さらには華人と共生を模索するマレー人などのインタビューが続く。人種暴動の後、マレーシアでは、マレー人を優遇するプミプトラ政策が推進された。政府は、暴動や民族対立の原因をマレー人と華人の経済格差ととらえ、マレー人を優遇することによって、マレー人の華人に対する敵意を和らげようと考えたのである。その後、マレーシアでは大規模な民族衝突事件や暴動が起きていないという点で、プミプトラ政策は一定の効果をもたらしたといえる。しかし一方で、多くの被害者を出した華人には優遇措置がなく、マレー人以外の民族のあいだでは、現在もプミプトラ政策に対する批判が根強く存在している。

本作のタイトルは、「斧は忘れても、木は覚えている」というアフリカのザンビアのことわざからとられたものだという。映画を観た後、このタイトルが心に深く訴えかけてくる。